

## 国語科における国際理解教育単元学習への試み

寺 本 学

### I はじめに

倉沢栄吉氏は国際化時代に問われる国語教育の基本問題として

「我慢強くおしん的な日本人、「頑張る」とか、「根性」という言葉に人気が集まる日本、それを失わずに一人一人  
が自信を持って自分を表そうとする自己表現力を、国語教育の中でどのように育てていったら良いか。コミュニケーション能力を更に高めて、コミュニケーションによる思いやりの心と、その実行力とを、自らの人格の中に内蔵して  
いくには、どんな単元の積み重ねが必要か。以上のような基本問題をはじめとして、古典を自らのものにする、異文化にどう出会わせ、それらをどう咀嚼していくか、……」と述べ、国語教育における国語教師への課題を提示している。（傍線、筆者）

私は3年間海外で生活する機会を与えられた。ポーランドのワルシャワ市にあるワルシャワ日本人学校に教諭として派遣されたわけだが、ポーランドで生活している現実の日本人の子供たちの姿は、私が想像していたものからは、はるかに掛け離れたものであった。

ポーランドでは約300人ほどの在留邦人の中、日本人学校の児童生徒は、小学校・中学校あわせて30名ほどである。全校生徒約30名のワルシャワ日本人学校のなかで、1年目には6組、2年目・3年目には4組の国際結婚の夫婦の子供がいた。また、聴講生制度があり、現在は4人（93年度には6人）のポーランド国籍の児童を受け入れている。このような、日本とポーランドとのダブルの文化をもっている子供たち（一般にはハーフといわれている）も多い児童・生徒の集団であるから、子供たちは日本人・ポーランド人という枠を越えて、お互いの国を尊重し合って生活しているものと想像していた。

しかし、現実には、日本人の大人たちはポーランドの現地社会と全く異質な狭い日本人社会を造り、その中で生きていた。したがって、その子供もまた、大人と同じような擬似日本生活をしているのに過ぎなかった。

だから、日本人の子供たちにポーランドの印象を聞くと、「不便なところ」「トイレなどが汚いところ」「貧しいところ」「物のないところ」「暗い感じのするところ」など、あらゆるマイナスイメージの言葉が口をついて飛び出してくる。児童・生徒自身が直接体験しているところは少ないのだから、親の考えが子供の口を借りて出ているのに違いない。

日本人は、外国に暮らしていても心は常に日本に向き、日本を基準にして物事を考えがちなのである。

自分自身を振り返ってみても、なかなかポーランドという国の良いところを見つけられなかったような気がする。1年が過ぎ、2年目に入って、ポーランドの人とのつき合いが広がり、家庭に招待され始めてからポーランドという国や人々へのイメージが変わったことが多いのであるから、仕方がないことかもしれない。

こういう3年間の海外生活で、私の中に、子供たちばかりでなく私自身が、日本や日本人というものについて実は何も知らないのではないかという疑問がわいてきた。「日本とは果たしてどんな国なのか」「日本人とはいったいどういう民族なのか」「何が日本文化といえるのか」など、日本の中にいて生活している時には、当たり前のことであって考えることすらなかったことである。

私は、この問題は、これからいやおうなしに国際社会の中で暮らしていかなければならない中学生たちに、国語教育の中でも育て、考えていかななくてはならない大切なものの1つであると気づかせられたのである。

多くの海外に住む日本人たちが基準にしている日本。物質的には豊かな国であることは間違のない事実である。

しかし、人の心は豊かなのだろうか。

ポーランドの首都ワルシャワに有名なワジェンキ公園がある。ここでは、有名なショパンの像があり、夏の間はかなり著名なピアニストがそのショパンの像の近くでショパンの曲を奏でる。親子連れ、恋人同士、たくさんのお年寄り、さまざまな人々がおもいおもいの格好で肌からじかにショパンを楽しんでいる。何のきどったところもなく、小さい子供たちも自然にクラシックの世界にいざなわれていくのである。冬の陽の短さから解放された街中の人が、おもいおもいに夏の日光を楽しみ、午後9時頃まで明るい一日を思いっきり楽しんでいる。

便利さに慣れ切った日本人にとっては、ポーランドのような不便な暮らしは絶えられない面もあるに違いない。しかし、便利な生活の中で忘れてしまった、人間としての優しさや思いやりの心、人と人とのコミュニケーションを育てたいものだ痛切に感じられた。

## Ⅱ 研究のねらい

日本も国際化の時代といわれてから久しいように思うが、学校教育の中では国際理解教育というと大変特殊な教育のように考えられているような気がしてならない。

私は国語科教師として、

1. 私たちが当たり前だと何の疑問も感じないで暮らしている日本そのものを探っていくことによって、自分自身を見つめ、考えさせること。
2. 外国（異文化）の比較によって気づいた日本の姿を正面から捉え、視野を広げ今後の生き方のステップとさせること。
3. 1、2の2つの考えを、読む・書く・聞く・話す活動を総合的に織り混ぜながら育てていくこと。

はできないものであろうかと考えた。

つまり、「国語科における国際理解教育にかかわる単元学習の展開」であり、今後の国語科学習のあり方を考えていく上での基盤の1つとなるに違いない。

本研究は、国語科としての国際理解教育とはどういう形で展開していくことが可能であるかを、今回の実践と生徒の学習記録をもとに研究・考察してみようとしたものである。

## Ⅲ 研究の基盤

田近洵一氏は国語教育の中での国際理解教育の歴史・現状・課題として、次の3点をあげている。（傍線、記号 筆者）

### 1. 日本人の問題として

「日本人の問題としていうなら、言葉の問題もあって、①他民族の生活・文化あるいは民族感情への無理解や、日本文化中心主義の価値意識が、外国人との関係をゆがめ、民族協調をスポイルしているといった現実がある。外国人の子供へのいじめは、そのひとつの現れではないだろうか。」

「また、逆に私たちは、日本人や日本文化に対する民族的偏見にさらされることが多くなってきている。私たちは、そのような現実はどう立ち向かい、日本の文化や価値意識を国際的にどう明確化していくか、その前に、②一人一人が日本人としての文化的アイデンティティーをどう確立していくかを考えなければならない。」

### 2. 教育における国際化について

「また、国際理解教育は、③外国の文化や外国人の価値意識への視野を広げ、受容の能力を育てることではあっても、自国文化に関する素養が貧困なまま、外国に自分の夢を託すような、単なる「外国理解教育」でもない。」

「すなわち、国際化時代の教育は、④異文化理解の教育であり、日本人としての文化主体形成の教育である。そしてそれは、⑤自己と他者との出会い（他者理解）を通して、自己を形成し、さらに、異質性を前提としつつも、相互の人間的な関係を広げていく——そのような能力を育てるという点で、国語教育の本質的なあり方につながるものだ

といえよう。」

### 3. 新しい時代の国語教育

「新しい時代の国語教育は、①日本語・日本文化への確かな理解を養いつつ、異文化への受容の幅を広げ、価値観の多元化する中で、言語によって自己を表現し、対話（共同思考）の場を形成する言語能力を養うものでなければならないのである。

国際化時代の教育、あるいは国際理解教育は、外国理解教育ではない。外国の言語・文化や諸事情への理解を広げることだけが国際化時代の教育ではない。その本質は、②多元的文化的相互理解の教育であり、その柱は次の三つである。

(ア) 自己のアイデンティティーの確立としての母国語教育（日本語・日本文化の教育）

(イ) 自分とは違う異質な他者を受け入れ、自己をとらえ直す他者理解の教育。

(ウ) 価値観の違うものとの間に共通理解を生み出すコミュニケーション能力の教育。

以上の観点に立つ時、国際理解教育は、初めて国語教育を本格的に見直す観点となり得るのである。」と述べている。

国語教育、大きく言えば日本の教育の問題をポーランドで現実にまざまざと見せつけられた私は、上に述べられた田所洵一氏の考えを基盤とし、私の体験したことを土台に生徒たちにぶつかっていかうと考えた。

なぜなら、海外の教育施設においては日本に先立って国際理解教育を進めているように思われるが、現実にはそれを進めていくべき教師がこのような考え方にはたっておらず、また、悲しいことには児童・生徒の保護者である大人たちが、日本を見てしか生きていないように思えて仕方がないからである。そして、海外で暮らす子供たちに重くのしかかってくる入学試験・選抜という大きな壁は、海外にいながら、現地と触れることよりも公式や文型をひとつでも多く覚えることを選択させるのである。

まず、教師自身、そして目の前にいる生徒たちをどうしていけば良いのだろうか。その解決のひとつの手がかりとなることを願ってこの研究を進めていきたい。

中学校での教育を終えようとしている中学3年生との出会いをきっかけに、附属中学校での国語科の国際理解教育の第一歩を踏み出そうと決心した。

## IV 実際の授業

### 1. 単元『日本・日本人について考える』から

（3年生 平成6年5月～6月実施）

### 2. 教材

(1) 教師のスピーチ

(2) 国語教室通信（毎週1回発行）

(3) 「雨は大地に入る」一ノ瀬恵（3年）教育出版

「民族と文化」本多勝一（3年）光村図書

「日本人の食生活」（部分）加藤秀俊（2年）三省堂

「包む」やまだようこ（2年）教育出版

(4) 補助教材（資料6、資料8）

### 3. 単元設定の理由と学習の基盤

ささやかではあるが、3年間のポーランド生活の中で考えたり感じたりした私の異文化体験を、生徒たちに伝えていきたいと考えていた。そして、国語科教師として、日本・日本人について、自分の国の文化を知り言語である日本語を大切に作る人間を育てたいとも考えていた。異文化についてのスピーチや資料を通して、今まで当たり前だ感じていた感覚を見つめ直し、自分なりの日本人論、日本論をこの時期に考えさせることは大変有意義なことであると考えた。

また、3年ぶりに日本の中学生に接して感じたことは、中学生の社会の中から縦社会も横社会もますます失われていっているのではないかという危機感であった。国際理解教育の基盤となるべき、他者への理解やコミュニケーションが失われていっているのである。4月に行われた修学旅行においても、みんなでひとつの目的に向かって協力していくというより、個人個人がいかに楽しむかという気持ちが強かったし、学習においては、その過程や興味・関心より、結果である点数をいかに取るかという事にしか興味のない点数主義者が多くなってきたのも事実である。

生徒をつかむために他己紹介の学習を初めに組んだが、他者への無関心さに驚かされた。それも1年間共に同じクラスで過ごし、活動を共にしてきたはずの仲間についてもそうであった。また、極端な生徒の場合には中学生においてもコミュニケーションを広げる必要を感じず、クラスは仮の場であって自分が今ここにいるという事には何の価値も見いださない生徒が増えつつある事には、現在の学校教育への疑問を感じさせられた。

このような生徒の現状の中で、いま、価値観の異なるものや異質なものを受け入れ、他者を理解し、コミュニケーションをふくらましていく教育が求められていかなければならないと考えた。

#### 4. 単元のねらい

本単元は、中学校の国語科において、学習者に

- (1) さまざまな情報から、日本・日本人について理解を深める。
- (2) 身近な生活とかかわらせながら資料を読み、自分の考え方を広げたり、深めたりする。
- (3) さまざまな情報を知り、また自分で情報を収集し、それを整理し処理していく力を育てる。
- (5) 自分で選択した情報を元に、日本・日本人について自分の意見を作る。
- (4) 文章の構想を練り、事実に基づいた構成の整った文章を書く。

以上の5つの力を育てようというねらいを持って実践したものである。

#### 5. 指導計画（全22時間）

“耕し”……1学期はじめから学習の中に適宜組み込む形で

- (1) 教師のスピーチ
- (2) ポーランド日本語弁論大会より
- (3) 国語教室通信にて

第一次 「私は誰でしょう」（他己紹介）（2時間）

第二次 生活の中から日本・日本人を考える。（3時間）

- (1) 日本再発見……スピーチと四つの文章を使って
- (2) 「日本ってどんな国？ 日本人ってどういう民族？ 日本の伝統文化って？」
- (3) 小さな日本の姿……生活の中の日本

第三次 教科書の文章を読む。（4時間）

「雨は大地に入る」「豊かさ再考」「民族と文化」「包む」

第四次 情報収集・情報処理（7時間）

- (1) 資料一覧チェック
- (2) 情報整理……付箋紙を使って
  - 黄 色……私の知らなかった異文化（事実）
  - 青 ……比較して考えられる日本・日本人の姿・文化（事実）
  - ピンク……日本・日本人の心、考え方、感覚など
- (3) 情報収集会……付箋紙を使って
- (4) 私の見つけた情報……家庭での情報収集
- (5) 題（テーマ）を考える

(6) 情報交換会

第五次 「小日本論」を作る。(5時間)

- (1) 構想を組み立てる……情報・意見を整理し、構成を考える。
- (2) 構想チェック
- (3) 40人の「小日本論」

第六次 学習のまとめ(1時間)

6. 授業の実際

指導計画の順に、授業の実際について生徒の感想と資料を添えて記す。

(1) “耕し”について

学習に入る時、国語科では学習者にその学習に入っていきためのきっかけ作りや基礎作り、学習途中でのヒントを与える手段として、さまざまな方法の「耕し」を考えている。この学習において、私は「教師のスピーチ・ポーランド日本語弁論大会の紹介・国語教室通信」の3つを学習への耕しと考えた。

① 「教師のスピーチ」は、はじめから学習の中に適宜組み込む形で4月から継続的に実施したものである。その内容を生徒の感想も交えながら、要約して掲げておく。

- ・「シベリアン・ハスキーとの出会い(1)」……スピーチを通信にメモする形で  
(㊦ペットについて、㊧アントシュという名前、㊨私のペット観、㊩3人家族から4人家族へ)
- ・「朝日歌壇から」……先生の今まで気づかなかったような記事としてのスピーチ

- ・クラコウのゲッターに母もいたというユダヤの友も母となり4年(東京 高橋)
- ・収容所番号示す腕歴史の恥部見せて記録者たる「シンドラーズ・リスト」(三島 浅野)

- ・「あたりまえのこと」……国語教室通信を使ってのスピーチと感想(資料1)

(今日の感想)

私は当たり前だと思てむことは恐ろしいことだと思ふ。便利な機械を良いとか悪いとか考えもせず受け入れてしまうからだ。このような社会に生きている私たち日本人は、異なった文化や習慣に出会うと悪い面ばかりに目がいってしまう。私達はもっと自分たちの社会を見直す必要があると思ふ。それができて初めて、他の文化を知ることができるのではないだろうか。

(Y子)

(資料1) 国語教室通信 No.3 より

<p>あたりのこと、今の出来事や生活状況を当時のこととして受け入れています。そして目下にあるわけです。例えは自動販売機、いつでも自由に使うことができます。それも雑誌、新聞、飲み物、食べ物、酒、タバコ、いろいろな種類がありますね。こういう便利な機械に慣れ、あるのがあたりまえの社会から、異なる社会に入ると、その社会を、遅れた社会だなど見してしまう人が何と多いことでしょうか。</p>	<p>国語教室通信 三年 No.3 H6.5.6</p> <p>あたりのこと、今の出来事や生活状況を当時のこととして受け入れています。そして目下にあるわけです。例えは自動販売機、いつでも自由に使うことができます。それも雑誌、新聞、飲み物、食べ物、酒、タバコ、いろいろな種類がありますね。こういう便利な機械に慣れ、あるのがあたりまえの社会から、異なる社会に入ると、その社会を、遅れた社会だなど見してしまう人が何と多いことでしょうか。</p> <p>ワルシャワは私がかいた三年間でずいぶん変化してしまいましたが、年がらう自由経済に移り、その変化の途中を体験したわけですが、ポーランドの首都であるこの街には、二十四時間スローカー、二軒しかありませんでした。もちろん自動販売機は一台もなく、買い物には妻が何時間もかけて街を走りまわらなくてはなりません。しかし、今、比較してみます。この街には対話があります。た、コーラ一つ買うにも、大根一つ買うにも、買い手が売り手が話をして買わなければならないのです。なぜなら、商品は台でさられた向ミウのたなに並べられていたからです。</p>
--	---

(今日の感想) 僕は今まで、自動販売機などをごくあたりまえのこととっていました。ポーランドに比べ日本は便利な国ですが、ポーランドのような売り手と買い手の会話が、今の人間、特に心の貧しい日本人には大切だと思いました。今日本では、店の中へ入ると機械があいさつをします。出る時もそうです。店の中では一言も言葉を発しません。このままでは本当に心の貧しい人間になってしまうと思います。(K男)

- ・「自分一人にもできること」 修学旅行の話……トイレのスリッパ
- ・「ダブルと呼びたい、塚本クレオ」(下にスピーチの原稿を示す……資料2)

(資料2) 「ダブルと呼びたい」 —教師のスピーチの実際—

ポーランドに来て、日本人学校の中には毎年4人から6人ぐらいのポーランドのお母さん、日本人のお父さんを持つ子供たちがいます。あなたたちは、こういう子たちを何と呼んでいますか？ 去年の夏までは、私はこういう子供たちを「ハーフ」と呼ぶのにまったく抵抗はなかったのですが……。

先日(もう一年以上前になりますが)、私は電話でワルシャワ大学の岡崎先生(ワルシャワ在住25年以上)と話をしてから、疑問を持つようになりました。

この岡崎先生は、ポーランドの奥さんと2人のお子さんをお持ちです。ですから、子供は、アンナ・東子・岡崎というように二つの国の名前を持っているわけです。

その先生との電話の中で、私は「日本人学校の中で、「ハーフ」の子供たちがいきいきと活躍できるような学校にしたいと思っています。」と話した時に、岡崎先生は「私は、「ハーフ」(半分)でなく、「ダブル」としています。つまり、子供たちは、日本という国や文化とポーランドという国や文化の両面を重ねて持っている、持つことのできる子供たちだと考えています。そういう点では、ほかの子供たちの倍の背景を持つと考えています。ただ、親としては、自分たちは日本人として、また、ポーランド人として生きてきたから、ダブルとして生きる子供たちの気持ちや体験にどう対応していいのかが難しいところがありますが……。」とおっしゃっていました。

この話を聞いた時、私は言葉の重さを感じ、そのような気持ちを考えもしなかった自分が情けなくなり、胸が痛みました。

そして、日本人学校に来ている塚本クレオさんという子供を思い浮かべました。彼女は、日本では「外人、外人」といじめられ、ポーランドでは言葉が自由にしゃべれないためにつらい思いをしたそうです。あなたたちは、この「ハーフとダブル」という言葉、どう考えますか。

(今日の感想) 私は「ハーフ」ではないし、「ハーフ」の知り合いもないので、別に「ハーフ」と呼ぶことに違和感はなかったが、それをいやだと思っている人がいたとは知らなかった。日本はほぼ一つの民族でできている国だから、他の国の血が混じることをマイナスイメージでとらえがちなのかもしれない。しかし、二つの国の文化をもてるということはすてきなことだと思う。(S子)

- ・「あらわな文化、かくれた文化」(血のソーセージ、鼻をかむ音、スープの飲み方)

(今日の感想) 日本人と西洋人に飲み方の違いがあることは知らなかった。音を出さずに飲むということは難しいことだけど、食べる感じにするとできることだなあと、私も実際に家でしてみるとできた。しかし、私

にとって音を出しながら飲んだ方が、飲んだなという感じがした。日本人はみなそう感じることだろう。西洋人には上品な音に聞こえても、私にはむしろ安心感を与えてくれる音なのだ。(K子)

- ・「日本再発見」
- ・日本の生活から消えた言葉
- ・天声人語「日系4世クリスティーナ山口さんのことば」

(今日の感想) 私はクリスティーナ山口さんのスケートをテレビで見て、すごいなあと思いましたが、今日の天声人語の言葉を聞いてもっと尊敬してしまうなと思いました。こういうふうになつての文化を大切に生きていく人もいるというのに、「ハーフ」と呼ぶのは間違っているなと思いました。日本人は保守的だから、ほかの国の血のまじった子供は完全ではない「ハーフ」と思うのでしょうか。(M子)

- ② 「ポーランド日本語弁論大会より」は、私のスピーチのかわりに、外国の人から見た日本の姿として紹介したものである。これも、その内容を生徒の感想も交えながら、紹介しておく。(資料3)

(資料3) 「休 暇」(ポーランド日本語弁論大会より 1992年) A・O

人によって、国民によっていろいろな休暇の過ごし方があります。しかし、日本人とポーランド人ほど極端に過ごし方が違う例はあまりないと思います。信じられないほど違いますので、その過ごし方について話しましょう。

休みといえば1年に1か月ぐらいの休みが取れないと、ポーランド人は文句を言います。それどころか、高等学校までの生徒は2か月、大学の学生は3か月もの夏休みがあります。夏休みだけです。それを体験したことのない、日本式の休暇制度で育った私の知り合いが、「海に一泊二日の休みに行く。」と嬉しそうにっていました。一年中働いてばかりいた、その日本人の気持ちが私にはわからないことはありませんが、休みを大事にするポーランド人だったら、一泊二日などは休みのうちに入らないと思うでしょう。

ポーランド人が休む時は、田舎に行きます。なるべく人の多い町を避けて、誰もいない、静かな山や森で休みたがります。日本は山の多い、人口密度の高い国ですから、人がいないところへ行きたいといたら、ぜいたくな高望みになるでしょう。かえって、山路を歩きながらも、人に会ったり、自動販売機を見かけたりしないと、日本人は不安になるかもしれません。

休みを取った日本人は、その大切な時間をなるべく効果的に過ごしたいと思っています。今まで見られなかったところを見物したり、できなかったスポーツをやったり、あまりにも積極的に一生懸命休むので、休みが終わるころは疲れ果てて、仕事を恋しく思ったりします。そこで、ポーランド人はこんなに長い休みをどう過ごすのかと、しばしば日本人に聞かれます。不思議なことに、ポーランド人はできるだけ何もしないようにするということです。散歩に行ったり、本を読んだり、好きなことだけやってゆっくり休みます。私の家族も毎年1か月や2か月は田舎で過ごしていると言ったら、ある日本人が、面白そうだからと一緒に田舎についてきました。しかし、一週間も経つと、「散歩と本だけでは物足りない、ポーランド人はよく何もしないでいられるものだ。」といって町に帰ってしまいました。

人によって、ポーランドのような長くて、のんびりした休みの方がいい人と、日本人みたいに積極的な過ごし方を好む人がいると思いますが、私のポーランドの友達にどちらの休みの方がいいかと聞いたら、「一年中休むことができれば、どっちでもOKだよ。」と言う答えが返ってきました。



(今日の感想) 私も日本は水に恵まれていると思う。中学2年の夏タイへ行った時、指導員の人が言い続けたことは、「蛇口から水を飲むな」ということだった。何度水を飲みそうになったことか。日本に帰って蛇口から水を飲んだ時は本当に嬉しかった。日本には「湯水のごとく使う」という言葉があるくらい水が豊富だ。しかし、日本人は水の大切さを忘れかけていると思う。(Y子) 通信No.4 「みず・ミズ・水」を読んで

今回の学習では、実際の学習に入るまでに、生徒たちの心の中をいかに異文化への興味や日本・日本人に対する興味・関心で満たせるかが学習の成否にかかわると考えた。そのために、一学期の初めからかなりの時間を使って少しずつ生徒たちの心を耕そうとしたのである。

上記の学習中うれしかったこととしては、「ハーフかダブルか」という教師のスピーチをした後、S子が「先生、スピーチで聞いたのと同じような話をNHKの中学生日記でやりましたよ。見ましたか。」と話しに来てくれたことがある。そこから会話が広がったのであるが、何と全く同じ発想の話を「NHK中学生日記」で取り上げていたのである。それに先んじて共に学習していたことにお互いちょっぴり誇らしさを感じた。

そして、また上記のY子のように、自分の異文化体験を思い起こし、私のスピーチや国語教室通信のコラムとかかかわらせて考えている生徒が数多く見られるようになってきたことに、この学習の手ごたえを感じたりもした。

## (2) 第一次、他己紹介……「私は誰でしょう」4月末

①海外旅行歴(旅行歴) ②趣味・特技 ③おしゃれ ④好きな先生 ⑤好きな歌手 ⑥好きなもの ⑦その他

この学習は、私が生徒一人一人をつかむためと、生徒自身が学校という社会の中でお互いをどうつかんでいるかを知ろうと思い、試みた学習である。また、身近な人をどう理解しているかが、今回の国語科における国際理解教育への試みの基盤となるとも考えた。

この学習では、まず、隣の人を紹介するという設定にして、男子は女子を女子は男子を紹介する形をとった。これによって、2人がお互いを紹介するための情報を得るために話を交わさなければならないというコミュニケーションの場ができてきた。生徒は次のように感想を述べている。

(今日の感想) 自己紹介は何回もやったことがあるけれど、他己紹介は初めてだなと思いました。難しそうだなと思ったけれど、やってみると、思ったより面白いものだなと思いました。今日の、クイズ形式で誰かを当てるとの発表で、今まで知らなかったその人の一面が見えて面白かったです。(T子)

## (3) 第二次、生活の中から日本・日本人を考える。

第二次としては、生徒たちの心の中に日常生活の中での日本・日本人について疑問を起こさせることをねらった学習を実施した。日本の中にはあたりまえでなんら疑問を持たない普段の生活を、少し視点を変えて外国の文化と比較してみたり、視点を変えた文章を読んでいくことによって、あらたな発見や疑問を持たせたいと考えた。

### ① 日本再発見……スピーチと4つの文章を使って

- ・プリント 「日本式料理はよい水でできた」 『水百科』河野友美 中公文庫
- ・プリント 「ワインは酒ではなく水である」 『水百科』河野友美 中公文庫
- ・プリント 「あらわな文化、かくれた文化」 『言葉と文化』鈴木孝夫 岩波新書
- ・スピーチ 「血のソーセージ、鼻をかむ音、スープの飲み方」 教師のスピーチ
- ・教科書 「包む」やまだようこ (2年) 教育出版

② 「日本ってどんな国？ 日本人ってどういう民族？ 日本の伝統文化って？」

(今日の感想) 今日は日本について考えた。どんなふうにとらえているか、いろんなイメージをみんなが出し合った。人によっていろいろなイメージがあった。なんかふっと思ったのだが、私は人からどんなふうに見られているんだろう。成績とか態度とか点数でつけられているけど、それらの点数のために必死になるのは少しさみしいような気がした。それじゃあ、どういうふうに生活すればいいのかなあ。いい時間ってどういう時間だろう。(M子)

③ 小さな日本の姿……生活の中の日本

(1、湿度 2、コンビニエンスストア 3、制服 4、目の色 5、月の名称)

(今日の感想) 鼻をかむ音などささいなことにも文化の違いがあるんだなと思いました。もし、今、「日本はどんな国ですか？」と聞かれたら私は何と答えることができるでしょうか。その答を自分なりに言えるようになります。(M子)

(4) 第三次、教科書の文章を読む。

- ・「雨は大地に入る」「豊かさ再考」「民族と文化」「包む」の4つの教材を使い、それぞれの中から「日本・日本人」について考えさせる材料を持つ部分を読み取り、一斉に情報化する練習をした。

(5) 第四次、情報収集・情報交換

- ① 共通資料一覧……全員に共通してもたせた資料を下に掲げておく。(資料6)

(資料6)

『私の日本・日本人の姿』

— 共通資料一覧 —

- |   |   |
|---|---|
| 1、教科書「包む」やまだようこ (二年) 教育出版                       | 10、国語教室通信1号 「シベリアン、ハスキー」  |
| 2、教科書「雨は大地に入る」一ノ瀬恵 (三年) 教育出版                    | 11、国語教室通信3号 「あたりまえのこと」  |
| 3、教科書「民族と文化」本多勝一 (三年) 光村図書                      | 12、国語教室通信4号 「みず、ミズ、水」   |
| 4、プリント 「トルコの水」岩井大輔<br>トルコ イスタンブール日本人学校          | 13、スピーチ 「ハーフとダブル」   |
| 5、プリント 社説「豊かな時間よ、もどれ」<br>朝日新聞 1994・5・29         | 14、スピーチ 「ポーランドの若者、日本の若者」  |
| 6、プリント 「文庫のあとがき」                                | 15、スピーチ 「ポーランドの休暇、日本の休暇」  |
| 7、プリント 「日本式料理はよい水でできた」                          | 16、プリント 「恥じらい、ひかえめ」1994・4・25 上毛新聞                                     |
| 8、プリント 「ワインは酒ではなく水である」<br>6.7.8……「水百科」河野友美 中公文庫 | 17、プリント 「豆腐に独自の文化を」1994・4・19 高知新聞                                     |
| 9、プリント 「あらわな文化、かくれた文化」<br>「言葉と文化」鈴木孝夫 岩波新書      | 18、教科書 「日本人の食生活」部分<br>加藤秀俊 (二年) 三省堂                                   |
|   | 19、「ほんとかな IS THAT TRUE?」<br>STEP. 43 STEP. 45<br>原作 ジョージ・グラダー 漫画 大山哲也 |

まず、初めにこの共通資料を使ってこの中から自分に興味のある情報をさがし、付箋紙に抜き出していく活動を開始した。初めからテーマを決めてそのテーマにかかわる情報のみを追わせていく方法もあるだろうが、今回は、生徒たちの現状を考え、たくさんの自分たちの視点、ものの考え方を覚えてくれたもの、さまざまな情報に出会わせることによって生徒の心を刺激していきたいと考えた。

その方法として次のように、3種類の付箋紙を使って情報を整理していくことにした。

② 情報収集・整理……付箋紙を使って（資料7）

- 黄色 ……私の知らなかった異文化（事実）
- 青 ……比較して考えられる日本・日本人の姿、文化（事実）
- ピンク ……日本・日本人の心、考え方、感覚など

（今日の感想） 今日まとめたことを見て気がついたのだが、水のことばかりなので、次は違う視点から見たものをまとめたいと思う。教科書とか新聞とかプリントがたくさんあるから、どれをまとめようかと悩んでしまう。まだ4つしか行（付箋紙）がうまっていないのでがんばらないといけないなあ。「日本人の考え方」なんて今までに考えてみたことがなかった。何となく習慣とかやっていたと思う。今回勉強を終えたら今よりずっと日本人になれるのだろうか。（M子）

（今日の感想） 『包む』という資料でまとめています。今日もらったプリントによると19も資料があるので、早く次の資料に行きたいのですが、まだ『包む』の中に日本人の姿がたくさんあるので、途中でやめるのは何かいやな気がして次の資料に移れないでいる。（M子）

③ 情報交換会(1)……付箋紙を使って

ここで、資料からどのように情報を集めているか、ほかの生徒の集め方の違いを知り、視点の違い、同じ情報でもそこから考える意見の違いなどに気づかせるために第1回情報交換会を開いた。

（今日の感想） だいぶいろいろな人と情報を交換したので、同じような情報を二度、目にすることがたくさんあった。そりゃあそうだ。考えてみれば、同じ資料を使っているのだからなあ。でも逆に違う意見もあって面白かった。自分のテーマにそって集めようとしているけどボツにするのが少し悲しかった。あっ！今思ったけど、だから情報交換して他の人がその情報を使ってくれるんですね。（M子）

（資料7）【情報集めの例】（A子）

日本・日本人の心・考え方・感覚 (ピンク)	比較して考えられる日本・日本人の姿・文化 (青)	私の知らなかった異文化 (黄色)	日本・日本人の心・考え方・感覚 (ピンク)	比較して考えられる日本・日本人の姿・文化 (青)	私の知らなかった異文化 (黄色)
日本では、できるだけ手を加えないで素材の風味を生かす料理をつくりあげたのはおいしい水だと考える。	日本は水の豊富な国。水は軟水に恵まれた日本人の食卓は、煮物、汁物、ゆで物、なま物といった水を多く使う料理が主流。	ヨーロッパや中国は水が悪い。蒸す、煮込む。野菜から出る水分を利用した水をなるべくストレートに使わない料理が発達。	今の日本人はそれを失っている。 本人のゆかしさ、美質である。	恥じらい、ひかえめというものはもともと日本人のゆかしさ、美質である。 よって恋愛の美しさが崩れてしまう。	恥じらい、ひかえめ フランスには、遠慮、尊敬のような人間関係はない。 日本のような人間関係の難しさに驚き。 またそれをいいなと感じる。
（共通資料一覧7より）			（共通資料一覧16より）		

④ 私の見つけた情報……私だけの情報収集（学校並びに家庭で）

こちらあたりで、全員の共通資料ではなく、自分だけの情報を何とか集めさせたいと考た。

情報は、

ア、テレビ・ラジオ・雑誌・新聞・本などから、生徒が自分自身の力で選んだ情報。

イ、生徒が自分で見つけられなかった場合も考えて、教師の方で用意しておいた情報。

の大きく2つに分けられる。

教師の方で用意した情報は下記のものである。（資料8）

(資料8) 『私の見つけた情報』 (教科書から)	—教師が準備したもの— (その他の資料)
<p>&lt;三省堂&gt;</p> <p>1、「文化というもの」木村 尚三郎 (二年) 1992</p> <p>2、「日本人の食生活」加藤 秀俊 (二年) 1990</p> <p>3、「日本人の表現」金田一 春彦 (三年) 1989</p> <p>4、「余暇」梅原 猛 (三年) 1989</p> <p>&lt;光村&gt;</p> <p>5、「ユーモア感覚のすすめ」アルフォンス・デーケン (二年)</p> <p>6、「日本語と国際交流」宮地 裕 (二年) 1987</p> <p>7、「手の文化」金子 厚男 (二年) 1984</p> <p>8、「法隆寺を支えた木」小原 二郎 (二年) 1984</p> <p>&lt;教育出版&gt;</p> <p>9、「飢えの世界」吉田 武彦 (三年) 1989</p> <p>10、「砂漠に育ったマングローブ」新聞記事 (三年) 1989</p> <p>11、「縁」上田 篤 (三年)</p> <p>12、「星の草原」司馬 遼太郎 (三年) 1980</p> <p>13、「映像化時代と言葉」堀川 直義 (二年) 1983</p> <p>14、「沈黙の世界」加藤 秀俊 (二年) 1989</p> <p>15、「無医村の優しい人々」渡辺 啓子 (三年) 1993</p> <p>&lt;東京書籍&gt;</p> <p>16、「視線を避ける文化」井上 忠司 (三年) 1993</p> <p>17、「日本語ってなんだろう」林 巨樹 (三年) 1993</p> <p>18、「日本人の好きな言葉」稲垣吉彦・樺島忠夫 (三年) 1989</p>	<p>1、「ビルマからの報告」NHK取材班 1985</p> <p>2、「南の島へいこうよ」門田 修 筑摩書房 1981</p> <p>3「アメリカの日本人生徒たち」シェンファー・ファーク東京書籍1987</p> <p>4、「文化の中の子ども」箕浦 康子 東大出版 1990</p> <p>5、「妻たちの海外駐在」ヒロ・ムト 文藝春秋 1985</p> <p>6、「遊びと日本人」多田 道太郎 筑摩書房 1978</p> <p>7、「ぼくは報道する」本多 勝一 筑摩書房 1971</p> <p>8、「カナダ・エスキモー」本多 勝一 朝日新聞社1963</p> <p>9、「未開の顔・文明の顔」中根 千枝 中央公論社1959</p> <p>10、「貧困なる精神」第20集 本多 勝一 スワウ書店1988</p> <p>11、「アメリカ風だより」千野 境子 国土社 1985</p> <p>12、「西洋交際始末」深田 祐介 文藝春秋 1976</p> <p>13、「甘え」の構造 土居 健郎 弘文堂選書 1971</p> <p>14、「考えて・歩いて・考えて」 葉山 茂 大日本ジュニアックス 1974</p> <p>15、「日本人の笑い」深作 光貞 玉川大学出版部1977</p> <p>16、「ものの見方について」笠 信太郎 ポプラ社 1963</p> <p>17、「昨今日本白書」深田 祐介 新潮社 1980</p> <p>18、「ぼくらの隣人たち」小泉 允雄・村上 公敏 筑摩書房 1976</p> <p>19、「ぼくの肌は黒い」吉田 ルイ子 ポプラ社 1978</p> <p>20、「日本語表と裏」森本 哲郎 新潮文庫 1988</p> <p>21、「笑いとユーモア」織田 正吉 ちくま文庫 1986</p> <p>22、「日本人の笑い」織田 正吉 日本放送出版協会 1989</p> <p>23、「だから日本は叩かれる」ポール・ボネ。 新潮文庫</p>

学習の中で、生徒たちがテレビ・ラジオ・雑誌・新聞・本などから選んだ情報と教師からの情報によって作った「私の見つけた情報」を4つに分類して掲げると次のようになる。（資料9）



ることで、生徒の拡散している思考と情報を整理し、「自分の小日本論」作りへ焦点化させていくためにどうしても必要な活動であった。

(資料10)

『私の考える日本・日本人の姿』 参考題名一覧

- |                      |                         |
|----------------------|-------------------------|
| 1、日本で快適に暮らすためには      | 16、外国人に教える 日本人の秘密       |
| 2、今までの日本人これからの日本人    | 17、こんなところがある日本          |
| 3、日本人なのにとっても外国的な人とは  | 18、比べて気づいた日本・日本人        |
| 4、外国人なのに日本的な考えをする人とは | 19、私の中に生きる日本            |
| 5、やはり私の心は日本人         | 20、知らないことは恐ろしい外国の姿、日本の姿 |
| 6、私の中に住む日本           | 21、こんなに違うのか世界と日本        |
| 7、ここがポイント・日本文化       | 22、これでいいのか日本人           |
| 8、「〇〇〇〇」の国日本         | 23、紹介します日本の姿            |
| 9、日本人の弱点             | 24、私はこんな日本が好き           |
| 10、ここがおもしろい日本人・日本    | 25、世界に通用しない日本人、する日本人    |
| 11、日本的ってこんなこと        | 26、ここが私の愛する日本           |
| 12、日本人が世界で生きていくために   | 27、理解されるだろうか日本の文化       |
| 13、昔から変わっていない日本      | 28、常識って何?               |
| 14、日本 ここを誇りたい        | 29、日本人を喜ばせる方法           |
| 15、日本人の常識            | 30、こうすれば日本人は困る。         |

⑥ 情報交換会(2)

(今日の感想) 友達と情報交換をすると、せこせこ自分で調べなくてもいい情報が楽に入ってくるので、とても得した気分だ。でも、自分が一生懸命集めた情報も簡単に持っていかれるのですこし悲しい。それは、こっちも相手から情報をもらうからちゃらかな。

題の決定で、とても悩んでしまった。それはなぜかというとは本当は私は『知らないことは恐ろしい外国の姿、日本の姿』とか『日本人を喜ばせる方法』とかで書きたかったのだが、情報が余りなかったし、書けそうもなかったので、一番無難な『外国人に教える、日本人の秘密』にした。これなら書けるかな。(M子)

(6) 第五次、40人の「小日本論」……文章化作業

いよいよ文章化の作業に入ろうと考えたが、その学習に入る前に、情報を具体的に整理し構想を組み立てるために、右にあげるようなてびきを準備した。(資料11)

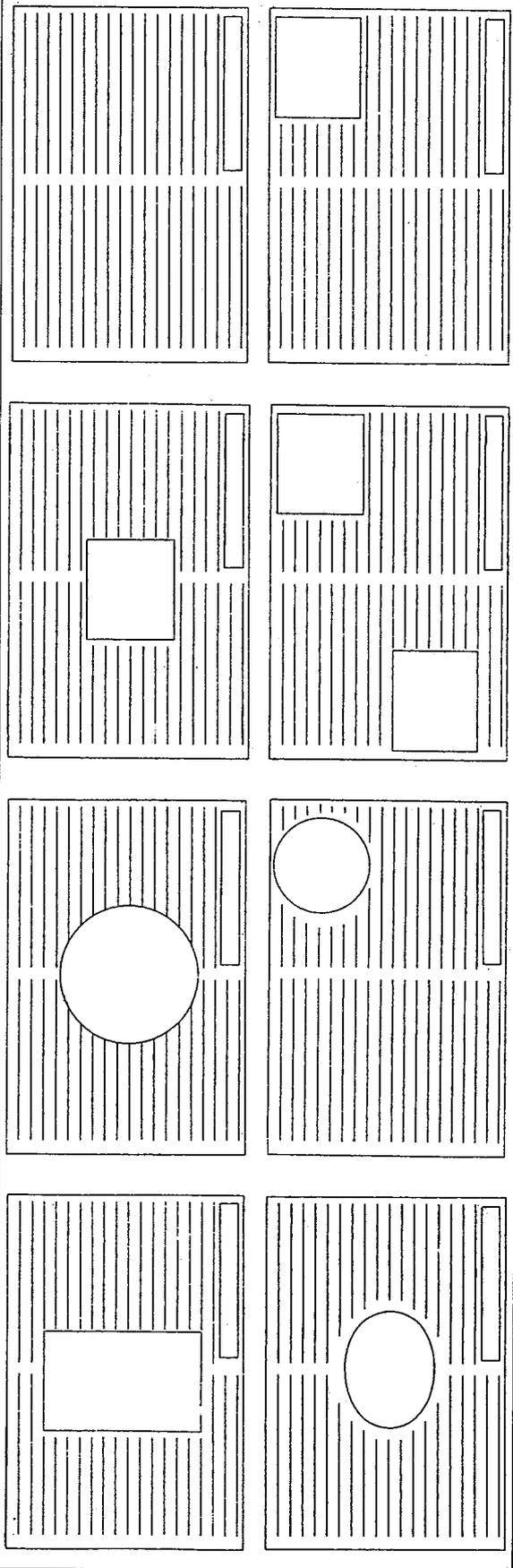
そして、生徒一人一人について、はたしてそれで書き進めていけるのかを考えながら、構想チェックの時間を作って個別に指導を進めた。この段階で、自分の意見が偏ったものにならないように反論を考えながら構想を考えさせ、そこを中心に一人ずつチェックして行ったのが特色といえる。

(7) 第六時、学習のまとめ

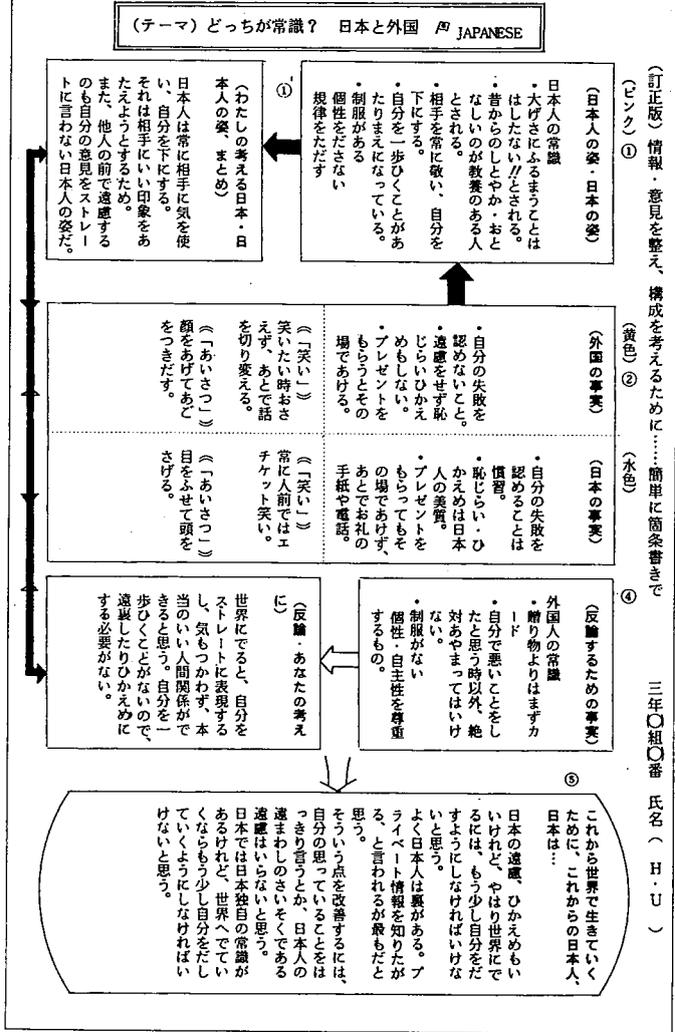
① 文章化

いよいよ文章化の学習に入った。ここで教師側が配慮したのは、原稿用紙であった。今までの学習のまとめとして、書こうという意欲のわくもの、生徒個々の特色を生かせるものとして次のような種類の原稿用紙を準備した。基本は次の8種類とした。(資料12)

(資料12) 原稿用紙各種



(資料11) 構想のてびき (H・U)



(資料14) 最後のページの書き方例

様々な事象を比較しながら、日本人の水に例える考え方をまとめてきた。私は、海外でくらす日本人が、あまりに自国の文化を基準にしてしまつことが多いため、大きな誤差をおかしているのではないかと思っている。

その例の一つが「水」にもはまりあられていたと思つ……。 (後略)

著者 近影

著書 寺本 学 (二冊五組一冊) 平成六年六月二十九日

参考文献・参考資料

- ・民族と文化 (本多勝一)
- ・「ボーラソンの生活」(寺本学)
- ・「水百科」(野友美)
- 一九八四 中公文庫

光村図書 三年

この8種類はもちろん書き出しとして使うためのものだが、同様な8種類の原稿用紙も準備した。

後となるページについては、次のような例を示して、生徒たちへの参考とした。





## V 考 察

以上の実践から、初めに述べた研究のねらいの「国語科としての国際理解教育の単元の展開」について考察していきたい。

この単元は、生徒への3つの基本的な願いと考え方から生まれたものである。

- ◎私たちが当たり前だと何の疑問も感じないで暮らしている日本そのものを探っていくことによって、自分自身を見つめ、考えさせる。
- ◎外国（異文化）との比較によって気づいた日本の姿を正面から捉え、視野を広げ今後の生き方のステップとさせる。
- ◎上記の2つの考えをいかせる、読み・書き・聞き・話す活動を総合的に織り混ぜた単元学習を創造し、いきいきと学習させる。

ここに私のあげた3点は、田近氏のあげた次の3つの視点と重なってくる。

## ○日本人の問題として

- ④ 他民族の生活・文化あるいは民族感情への無理解や、日本文化中心主義の価値意識
- ⑤ 一人一人が日本人としての文化的なアイデンティティをどう確立していくか

## ○教育における国際化について

- ④ 外国の文化や外国人の価値意識への視野を広げ、受容の能力を育てること
- ⑤ 異文化理解の教育であり、日本人としての文化主体形成の教育
- ⑥ 自己と他者との出会い（他者理解）を通して、自己を形成し、さらに、異質性を前提としつつも、相互の人間的な関係を広げていく

## ○新しい時代の国語教育

- ④ 日本語・日本文化への確かな理解を養いつつ、異文化への受容の幅を広げ、価値観の多元化する中で、言語によって自己を表現し、対話（共同思考）の場を形成する言語能力を養うもの
- ⑤ 多元的文化の相互理解の教育

以上のような考え方にたって組み立てた「国語科としての国際理解教育の単元」である。したがって、生徒の学習記録をもとに本単元の具体的なねらいの達成状況を考察していくことが、国語学習単元としての展開が充実したものであったか否かを考察していくことになると思う。

本単元では、学習者につけたい力を次の5つの具体的なねらいにしぼり、それぞれの評価項目を設定して学習を進めてきた。以下に、生徒の感想をあげ学習中の様子も振り返りながら、考察してみたい。

## 1. さまざまな情報から、異文化や日本・日本人についての理解を深める。

（関心・意欲・態度）

- ◎積極的に話を聞き、ものの見方や考え方を深め、生活を向上させようとする。
- ◎わが国の文化や伝統、外国の文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重しようとする。

（表 現）

- ◎新しい発想や立場に立った考え方を、今までの自分の考えと比べて、感想や意見を書くことができる。

（理 解）

- ◎話し手の立場や話の根拠を考えながら、話の内容を的確にとらえることができる。
- ◎筆者や話し手の考えの進め方をとらえ、内容を理解し、自分の考えと比べることができる。

私は公立の中学校で教科書にそった学習しかやったことがなかったので、国語の授業で「日本の姿・日本人の姿」

## 国語科における国際理解教育単元学習への試み

を考えると先生が言われた時、こんなに面白い課題を今からやるのかと思うと、私にもできるか不安だったけれどもとても楽しみでした。(後略)

日本人の姿を調べるといっても社会科ではなくて国語の授業だということで、たくさんの本を読んでいるいろいろなことが分かったので良かった。(後略) (1組E子)

このE子の感想を見ると、この単元が必然的に社会科との合科的な学習展開となっていることが分かる。初めて単元学習に接したE子にとっては新鮮な驚きであったに違いない。今後、国語科としてはますます合科的な発想で、単元を作っていかなければならないだろう。

先生が最初に「日本人って何だろう」みたいなことを言われた時、困った。僕は日本人のつもりだったけど本当は日本人じゃないのかもしれないと思った。日本人とは「日本語で思考する民族」だと言われた時なるほどと思った。でも「日本人らしさって何だろう」という次の質問で、またまた困ってしまった。最初「日本語をしゃべれるところ」と思ったけど、それだけじゃないような気がした。僕は『水』を通して日本人らしさを探ろうと思った。(4組S男)

初めて、日本の姿、日本人の姿を学習するということを聞いた時、私たちは日本人なのだから日本のことを知っているに決まっていると思いました。けれど、その後で先生が「外国の人に、日本はどんな国ですか? と聞かれたらどう答えますか。」といわれて、私はどんなに頭を働かせても、日本を紹介する言葉が見つかりませんでした。そして、それを悔しく思い、私は日本人・日本を知る必要があると強く思いました。(3組I子)

私は実のところどこからがこの学習だったのか良く覚えていない。1学期の初めあたりで先生のスピーチされた「アントジュ」のことや、ポーランドでの買い物の話、これなんかも日本と違う異国の話であった。私はただこれらのお話を面白いな、ポーランドってこんな国なのかとふっと思っただけだった。しかし、その後で始まったいろいろな国のお話、これにはショックを受けた。特にアラブの民族。私はそこから日本っていう国のことを考え始めた。

(4組Y子)

メモックで情報収集をしている時、初めわけが分からなくて、適当に3、4枚やってみて先生に見ていただいた時、先生は僕のを見本としてみんなに伝えていました。少し大人気ないけど、それをきっかけに僕はこの学習に力を入れるようになりました。(1組T男)

今回の学習で工夫した“耕し”の効果について3人とも感想で触れている。単元を作っていく時には、まず、生徒たちにこの学習への興味・関心をわかせていくことがどの程度できるかということがカギになる。それが、単元を継続していく原動力となるからである。S男、I子は、教師の働きかけの言葉やスピーチによって自己の内面を見つめ自分の心の中の矛盾に気づき、日本・日本人について考え始めている。Y子の場合には、スピーチなどによって少しずつ心の内側に蓄えられてきたものが、ある日、1つになって発芽していく過程を見ることが出来る。

また、T男の場合のように、学習へ向かう気持ち作りとして、その生徒に在感を持たせてやる配慮が単元学習の場合必要となる。一斉学習と違って個々の学習資料や活動がそれぞれ異なっていくわけであるから、教師としては、その時間ごとに生徒一人一人の現状をつかむために、さまざまな工夫をしていかなければならないようになる。ここに単元学習の難しさがある。

僕はこの学習を通して自分の感覚(主に日本に対する)は、変わり始めていったと思う。それは、“自分が日本人であるという誇り”を持つことにもつながった。たとえば資料の中にあった「恥じらい、控えめ」というもので、日

本人の美しい部分を発見したことや、日本独特のものを発見したことが多かったからだ。(2組K男)

やはり、この学習で勇気づけられたのは、徐々に生徒の感想の中からのこのK男のような感想が出てきたことである。特にこの生徒の場合には、日本人として日本の今まで気づけなかった美しい部分を発見した喜びを素直に感じ、日本人としての誇りを心に抱いてくれている。日本至上主義の偏見に満ちた誇りでなく、素直な心からでた気持ちであることが私を勇気づけてくれた。

## 2. 身近な生活とかかわらせながら資料を読み、自分の考え方を広げたり、深めたりする。

(関心・意欲・態度)

- ◎異文化・日本・日本人に関心を持ち、進んで情報を得ようとする。
- ◎これまでの自分や日本社会を振り返り、見つめ直して、これからの自分を考えていこうとする。
- ◎異文化や日本・日本人について興味を持ち、課題に対して考えを深める(広げる)ために、読書領域を広げようとする。

(理 解)

- ◎文章の要旨をとらえて、生活の場面と結びつけることができる。
- ◎筆者の考え方について、補助資料を重ねて読み、多面的な見方をすることができる。
- ◎自分と異なる見方や考え方に触れて、自分の思考を拡充・深化させることができる。

私はこの学習に入るまでは日本文化が最も良い文化だと思っていた。海外で日本人が傍若無人な振る舞いをするのも別に関係ないやと思っていた。が、しかし、資料を集めていくうちにその考えはあっさりくつがえされた。「文化は良い悪いというものではなく、両価値を同時に含むもの」という文を読んで、そうか、日本文化にも悪いところはあるし、他国の文化(例えば銃を所持するとか)の中にも、その国の歴史、良いところが日本のそれに負けず劣らずあることに気づけた。とても収穫があった。(4組U男)

最初僕は、日本が一番良い文化をもっていて、頭も良く昔から外国人のあこがれの国だと思っていた。いろいろな機械が発達して、経済的にも豊かで、何も言うことのない文化を作り上げてきた日本。その日本も外国との交流を通して様々な異文化を取り入れてくればもっと良い国になると信じていました。

この学習を通して外国のいろいろな文化を見てきました。結論から言うと自分だけではかの文化を測ることはできないということが、最後に僕の心の中に残りました。(4組N男)

国語というものについて、自分の国だけに目を向け、そして学ぶという固定観念がありました。だから、やたらと先生が外国の話や資料を配られたりしても、今一つピンときませんでした。私も情報化社会の落とし穴とも言えるべき「ものの一面を見て、そのすべてを知ったつもり」つまり、新聞やテレビ等から得る日本という国の知識をすべてだと思い込んでいた日本人の一人でした。だから「日本でどんな国？」と聞かれても「四方を海に囲まれた国」とか「人口は1億2千万」だとしか答えられない自分に気づき、自分の国を国語で学びながらも表面的なことしか知っていない自分に気づき始めました。

多くの日本人がそうであるように自分の国を全て基準にして外国や物事に接してきました。でも外国の様々な文化に「日本」という色眼鏡をはずして目を向け、そこから逆に見る「日本」はまた別のものなんだということが分かり何か国語に対する考え方が変わりました。この学習を通して、自分の国のことは「灯台もと暗し」で分からない、だから、「自分の国の文化を知る」ことは「異文化を知る」ことから始まるということを実感しました。(2組H子)

左のU男、N男の2人の生徒に代表されるように、日本の中学生の心の中にも“日本至上主義”の影が見え隠れしていることに、いまさらながら驚かされた。しかし、これを教師側から一方的な説教として諭しても何ら効果は期待できない。生徒の心の奥までは動かすことはできないであろう。こういう単元学習を展開する効果として考えることができることは、自分自身の興味・関心によって、自分で学習しながら、自分の心に問いかけ、自分の心を見つめ直し、自分でその愚かさに気づくことができることである。H子の学習前、学習後の感想からもこの単元によって意識が変容していったことがうかがえる。

—私は日本人だと胸を張って言えるだろうか。私が普段見ているのは当然日本人。だけど、すべて日本文化というわけではなく、私にとって文化は普通の生活である。日本の常識が世界で通用しないということは知っていた。前に「世界の常識」というTV番組を見て、世界各国の常識は日本人の私にとって何ともびっくりするばかりだったからだ。逆に考えれば、世界から見て、日本も変わりに変わりまくっている文化をもっていることになる。調べを進めていくうちに、日本文化を中心に考えてきた頭の中をもっと自由でなんでも納得できるようにしなければいけないことに気づいた、日本人だけ……。 (1組F子)

この学習は、今まで、本当に何気なく見ていたものや、何気なく使っている言葉や習慣が、実は日本独特のことだったり、日本の特徴を表していたことを知って驚くことばかりだった。この学習で、これから外国人の人に胸を張って日本のことを紹介できるようになった気がする。これからの国際社会でうまく生活していけるいい材料になった。

(4組T男)

F子、T男の感想によって、私たちにとって当たり前過ぎていく日常生活の中に日本があり、その日本の姿を自分自身の力で見つけていった生徒たちの学習中の姿が浮かんでくる。

### 3. さまざまな情報を知り、また自分で情報を収集し、それを整理し処理していく力を育てる。

(関心・意欲・態度)

◎進んで自分で資料を捜し、調べようとする。

(表現)

◎テーマに沿って材料を捜したり、集めたり、調べたりすることができる。

◎広い範囲から素材を集めることができる。

◎目的や場面に応じた表現をするために話題や題材を効果的に選ぶことができる。

◎事実を抜き出し、そこから自分の考えや意見を作ることができる。

(理解)

◎書物などに示されている筆者の考えの中を、自分のテーマとかかわらせながら読み、自分の見方、考え方を確認したり広げたりすることができる。

(言語についての知識・理解・技能)

◎筆者の論理の展開の仕方や文章のまとめ方など理解できる。

私はメモック(付箋紙)に自分の意見を書くころ何を考えていいのかわかりませんでした。「もっとはっきりしたもっと日本がわかる資料が欲しい。」そう思っていたころ、ある1冊の本と出会いました。それには日本の食文化とイギリスの食文化の違いが書いてあり、それによって私は自分の意見が少しずつまとまっていきともうれしくなりました。(3組S子)

私はテレビでベドウィンのことについてやっていたのでそのことを書くことにしたのですが、何しろ本等の資料と違って、文字になっていないので自分で見つけるのには苦労しました。(1組K子)

毎日、新聞を読む時も「何か関係あるものってないかなあ」と注意しながら読むようになりました。いつも社会面とテレビ欄と漫画しか読んでなかった私にとって、それは大きな進歩といえるでしょう。(1組I子)

(前半省略)

……作業をしていると少しずつ見えてくる日本の姿。自分で資料を集めるのは少し大変でしたが、テーマにあった資料の見つかった時の感動を味わえたのが良かったのではないかと思います。(1組F男)

今まで日本人でありながらも、日本人の姿なんて考えてみたこともなかった。最初は気が進まなかったのだが、調べていくうちに、いろんな情報を見たりしていくうちに日本人の姿が少しずつ浮かんできて、その事実が(自分にも当てはまるな)とか思うと少しずつ楽しくなってきた。調べていくうちに、文化には両価値があるというやまさんの言葉が分かったような気がする。(4組M子)

私は、この学習をする前「日本の姿」という題を見て面白そうだなあと感じていました。しかし、始まった勉強は個人作業の連続。あらゆる資料を読み、書くということの繰り返しで、刺激のない勉強でした。でも、学んでいくうちに日本という国がだんだん見えてきて、少しずつ“面白い”という感覚を覚えるようになりました。本当に学ぶということは個人個人が行うのだと思うようになってきました。今までの学習と自分が持っていた日本に対する思いが変わっていきました。日本の姿を捜すことが学習することにつながっていくのがとても嬉しかったです。

『日本の常識』ということで調べ続けてきたこの学習に私は多くのことを教えられました。「文化」という大きな問題や「国際化」という大きな課題が、本当は、私にとってとても身近で真剣に考えなければならないことだということを知りました。(後略)(2組Y子)

僕は『日本の常識』というテーマで、今まで学習してきたが、一人一資料や、メモックを使った情報収集で友達からや本からなどいろいろな情報を入手することができた。テーマを決める時、たくさんの情報があり、どんなテーマにするか迷ったが、僕は日本と外国との常識の違いについての情報をたくさん持っているのでこのテーマにした。

(4組M男)

テレビ・新聞・本と広い範囲から素材を集めようと努力し、その積み重ねによって自分の意見がまとまっていくことへの喜びや求めていた情報との出会いの喜びを感じている。また、その自分自身の思考の深まっていく姿を客観的にとらえているのにも生徒の学習による成長が感じられる。

その中でY子のように、情報を収集し整理していく個人作業の中で、その苦しみとともに学ぶ(自分で学習を作り上げていく)楽しさを感じ取っている生徒もいる。そして、与えられたものをただ読むという学習の方法ではなく、自分自身で読んだり、感じたり、考えたり、書いたりすることが国語の力をつけることにつながっているのだという単元学習の効果と学ぶということについて述べている生徒もいる。

最初はどのような感じで授業が進んでいるのか良く分からなくて、作業もあまりよくできなかったけど、情報を集めているうちにけっこう面白くなってきた。また、やっている途中でもマイペースでやれるので、少し休憩もできていい学習だと思いました。やっている時は真剣になっていて、時間がとても早く過ぎていきました。もっとたくさん時間を取ってほしいと思うぐらいになりました。(1組I男)

また、このような単元学習の中で、I男はマイペースで学習を進めていくことができる安心感をあげている。一斉に同じペースで進んでいく一斉学習にはない、個々の生徒の実態を生かす場がここにはある。

個々の情報処理の力を見るために、次のような評価表を準備し、一人一人を評価した。(資料17)

(資料17) 『私の考える日本・日本人の姿』 評価表				
3年 組 番 氏名				
番号	項目	内 容	具体的な評価の得点と方法	合計
1	提出	提出日を守った	15 10 5 0	/15
2	学習の感想	学習の前後の気持ちを詳しく書けている。	AAA AA A B C 14 12 10 7 5 3 1	/10
3	情報整理用紙	・多くの文献や資料からの情報か ・内容的に確にまとめているか	枚 数 × AAA AA A ( 3 2 1 ) × ( 8 6 4 )	/15
4	わたしの見つけた情報	・情報として価値あるもの ・評価は最高二枚までとする ・枚数の多いものは内容で評価	自分の情報 × 枚 数 × AAA AA A B C 3 × 2 1 × 5 4 3 2 1	/15
			先生の情報 × 枚 数 × AAA AA A B C 2 × 2 1 × 5 4 3 2 1	
5	構成を考える	・思考の流れをまとめているか ・立ち止まって自分の考えを見つめ直しているか ・適切な具体例であるか	①と①' ② ③ ④ ⑤ AA 3 3 3 3 3 A 2 2 2 2 2 B 1 1 1 1 1	/10

4. 自分で選択した情報を元に、日本・日本人について自分の意見を作る。

(関心・意欲・態度)

- ◎国際理解について課題意識を持ち、進んで読んだり考えたりしながら、自己の視野の認識を深めていこうとする。
- ◎自分の今までの経験と照らし合わせながら、主体的に読み進め、考えようとする。
- ◎異文化に関心を持ち、自分たちの生きる社会を広い視点で見つめ、考えていこうとする。

(表 現)

- ◎自分たち（広くは日本人）のこれからの生き方について文章に表すことができる。
- ◎筆者のものの見方や考え方をとらえ、日本・日本人について自分自身の考えを表現できる。

(理 解)

- ◎資料を重ねて読み、それに対して自分なりの考えを持つことができる。
- ◎話や文章に生かされているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を深めることができる。

このねらいについては、生徒自身が完成させた160人のそれぞれの「日本・日本人について考える小論文」を見て分析していかなければならないだろう。その視点の鋭さや情報処理の見事さにかぶとを脱ぐ生徒も多かった。しかし、ここでは、紙面の都合により、生徒の意識の変容の分かる感想をあげて考察しておくことにする。

次にあげる6人の代表生徒の感想から、日本人や日本を理解していなかった自分自身への恥ずかしさ、日本文化への誇り、日本への理解者への感謝の気持ち、実際の姿を確かめたいという意欲、1つの日本・日本人論を持った自分への自信などが読み取れる。

また、※の部分「私は異文化を否定せず受け入れ、自国の文化も大切にす」「日本人全員がこの授業をやって理解してくれれば、「水の国」は永遠になるかもしれません。」「これからの日本人はどう生きていけば良いかということである。」という生徒の感想の中に未来に向かっての思考が現れているのは、この単元学習が生徒の心に投げかけたものの大きさを感じさせるものであると私は考えている。

小論文をまとめた後、急に外国へ行きたくなった。本で読んだだけのことが本当にそうなのであるかということこの文化を持つ国はどんな国なのかということを感じてみたくなったのです。(4組U男)

この学習をやる前は、なぜこんなことをしないとイケないのだろうかと思っていた。自分の国のことなんかなんでも知っているよ、と思っていたのだ。しかし、少しやり始めてからはこの考えがなくなった。いかに自国の説明が難しいか分かり、と同時に自分自身日本人として、本当に日本を知っているのかと思い、自分が恥ずかしくなってきた。そして、日本を知るために外国の文化を調べたのは、初め不思議だった。

この学習を終えて、僕は少し日本人になったなという気がした。この学習の前の自分は日本を知らなくて、本当は知っていると思っていただけだったのでとても恥ずかしく思う。異文化を知ること、自分の文化をよりよく知ることができるのは、けっこう意外だった。あたり前があたり前じゃない、そういうのは何となく不思議な気がした。

(3組O男)

以前から私は、外国の文化・言語などに興味を持っていました。それは私の将来の夢に大きくかかわっているからです。私は将来、英語もしくはドイツ語・中国語の通訳になりたいからです。この狭い日本だけじゃなくて、広い世界を見たいのです。その私にとって日本を知ること以上に外国を知ることができた学習でした。日本人の心の中にある“恥じらい”そして、遠慮・尊敬・つつしみ・思いやり。外国の人には理解されないであろう日本固有の文化。これらを勉強して、私は今まで以上に日本の文化に誇りがもてるようになりました。

昨日ニュースを見ていたら、外国人の大使が、「日本の文化をもっとよく知って、自分の国の人に教えてあげたい」とおっしゃっていました。何だかすごくうれしい気がしました。この学習を通して※私は異文化を否定せず受け入れ、自国の文化も大切にすると、そういうことを教わった気がしました。(1組Y子)

今回の学習で私が知ったことは、日本のごく一部でしかないかもしれないけど“日本ってこういうもの”という考えが自分の中にあったら、これから外国の人と接する時に自信になると思います。(4組I子)

書き終わった時はとてもすがすがしかったです。でも書いている途中の驚きや発見は、終わってからは何だか日本人の悪いところにかかわって僕の頭の中になりました。「水の大切さを知らない」「自然破壊」などです。『水の国日本』いつまでこの言葉が使われるか心配になってきました。※日本人全員がこの授業をやって理解してくれれば、「水の国」は永遠になるかもしれません。(1組Y男)

学習を終えて私が今一番感じていることは、※これからの日本人はどう生きていけば良いかということである。私たちは日本人らしさをなくし、日本の文化についても外国人のほうが良く知っていることは大変残念である。

(1組I子)

##### 5. 文章の構想を練り、事実に基づいた構成の整った文章を書く。

(表 現)

- ◎根拠を明らかにしながら適切な文章や図などにまとめ、説明することができる。
- ◎自分の意見文を推敲し、相手により正確に自分の考えが伝わるように配慮することができる。
- ◎まとめ方を学び、より効果的な構成法について工夫し、実行することができる。
- ◎自分の考え方を客観的に見直し、考えを深めることができる。

(理 解)

- ◎調べたことをまとめることで、効果的な表現の技能を身につけることができる。

(言語についての知識・理解・技能)

- ◎文章の展開の仕方や文章のまとめ方などを考えることができる。
- ◎目的や必要に応じて適切な形式や文字の書き方を考え、調和よく書くことができる。

この学習が終わって新しいことをいくつか発見し、やってみることができた。筆頭にあげられるのは(小)論文を書く面白さだろうか。今まで論文を書くのは難しいものだと思っていたが、意外に面白かったのだ。それから今までに読んでいた本の内容を覚えていたおかげで資料として使うことができたこと、自分はこうすることで凄く日本論に影響があったと思う。いろいろあったが、結局最後に言いたいことは“書き足りない”ということだろう。(2組K男)

今回の学習で僕は「反論」があることの意義を知った。自分の素直なイメージはどれでもいいものばかりだった。そこに「反論」という構成を入れると、本当にこれでいいのだろうかと思いついて立ち止まって考えることができる。本当にこのような目で日本を見ているのか? と考えて文章を作っていくと、より一層深みが増してくると思った。

(1組O男)

ア) 私の知らなかった異文化、イ) 比較して考えられる日本・日本人の姿、ウ) 日本・日本人の心・考え方・感覚などの3つに分けて情報収集したさまざまな事実を処理していくために、資料11のてびきを準備した。このてびきの特色は2つあり、1つは上のア) イ) ウ) の情報をそのまま利用して考えをまとめ、深めていけるように工夫していること、もう1つは反論を考えさせ文章構成に張りを持たせようとしたことであった。

このてびきを利用することによって、O男が書いているように“ちょっと立ち止まって考えさせる”場を作ることができたと思われる。ただし、この学習場面では生徒一人一人の今までの思考の流れに逆の方向の流れを与えなければならぬために、教師のほうは生徒一人一人をしっかりととらえなければならぬから大変指導が困難な場面となってくる。しかし、このチェックによって生徒の思考が深まっていったのは確かである。

また、学習後の生徒の「小日本論」への評価は次の評価表によって示した。(資料18)

(資料18)									
『私の考える日本・日本人の姿』評価表									
3年 組 番 氏名									
番号	項目	内 容	具体的な評価の得点と方法				合計		
1	はじめ	・文章の書き出しに工夫がある	AAA 5	AA 4	A 3	B 1	C 0	/9	
2	資料・文献	・文献・資料からの具体例が効果的に使われている。	AAA 5	AA 4	A 3	B 1	C 0		
3	再考	・自分の考えを無理に通さず、立ち止まって視点を変えてる。	AAA 5	AA 4	A 3	B 1	C 0		
4	未来の日本人	・国際社会の中で、今後の日本人のあり方を考えさせられる。	AAA 7	AA 5	A 3	B 1	C 0	/3	
5	カット飾り	・内容を効果的に伝えるために必要である。	AAA 5	AA 4	A 3	B 1	C 0	/3	
6	全体	・枚数的にも充実し、先生を驚かせ、なるほどといわせた。	特別賞	AAA 10	AA 8	A 6	B 0	C	/6
7	愛	・丁寧に仕上げ、学習への愛情を感じさせる。	AAA 7	AA 5	A 3	0		/3	

この学習には終点がない。情報も次々に新しいものが生まれてくるし、学習はさまざまな方向へ広げることが可能であろう。K男のように書き足りないという気持ちが生まれてくるのも当然である。しかし、今回は、国際理解教育の第一歩としての手ごたえを感じることもできたので、ここで学習をまとめることにした。

## VI 今後の課題

次の点を今後の課題としたい。

### 1. 単元学習への工夫

あまりにも自分自身の体験が強烈であったために、帰国間もなく1つの大きな国語学習単元として緻密に学習計画をたてぬままに出発した。そのために単元として熟していない面があったことはぬぐいきれない。しかし、この海外体験を元に考えた「日本・日本人について考える」という学習は、私自身に課せられた大きな課題であったために、生徒の心をさまざまな方法で耕そうと努力をし、無我夢中で生徒にぶつかっていった学習であったと考えられる。

今回の実践で生徒に紹介したさまざまな体験も、単元に則して、より熟成させ、発酵させてエキスとせぬままに生徒にぶつけていったことが悔やまれる。やはり、生徒の意欲よりも私の個人的な意欲があまりにも前に出すぎたのではなかったかという疑問が残される。

今後、このような国際理解教育にかかわる単元学習をしていく上で、単元学習が大変効果的な学習であることは疑いないところだが、1つの完成した単元として成立させるためには、基本のところ課題が残された。

### 2. コミュニケーション能力を高める教育について

今回の学習においても、完成した一人一人の「小日本論」を使っての発表や話し合いという発展学習を考えていた。しかし、膨大な学習時間となるために、今回は「小日本論」を完成させたところで学習を終了させた。

そのために、私が初めに述べた基本的なねらいはほぼ達成できたと考えるが、学習は、「聞く」「読む」「書く」の3つに偏り、「話す」ことは、取り立てて力をつけられるような場面設定ができなかったのが悔やまれる。

本校国語科では、「聞くことの学習指導」から「話すことの学習指導」に研究の視点を移している。今後は、話すことを中心に捉えた、コミュニケーション能力を高める「国語科としての国際理解教育」のあり方に重点をおいて研究を続けていかなければならないと考えている。

## 参 考 ・ 引 用 文 献

- |                                       |                          |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 『国際理解教育と教育実践<br>—国語科における国際理解教育—』      | 編者 倉澤 栄吉 1994 エムティ出版     |
| 『中学国語観点別学習状況の評価基準表<br>—単元の評価目標と判定基準—』 | 編集 北尾 倫彦・金子 守 1994 図書文化社 |